



文学研究科
福島 祥行

パスカル氏のメモワール

大抵のことはネットで調べられる時代だが、ネット上のデータは玉石混淆のうえ、リアルなデータでしか調べられない物事もある。というわけで、パリの五区にあるソルボンヌ大学の図書館で調べ物を終えた樹里は、空腹を満たすべく、聖ミカエル大通りをわたり、王太子通りをめざしていた。樹里がソルボンヌに留学したのは、恩師に「外の視点を持つためには外に身を置くべし」と云われたからだ、フランス語を履修したのは、たんにオシャレといえどフラ語という先入観のため、その先入観は、教室に現われた先生が絶望的にオシャレでないことから、早々に打ち砕かれた。ちなみにその先生は、CEFR（欧州共通言語参照枠）という、言語を学び教えるための参考指針があつて、その理念は、言語を学ぶことが争いのない世界を生むというものなんですと、嬉しそうに学生たちの顔を見たが、オシャレやスイーツ以外を語られても、みなボカンとするばかりであった。「他者の言語を学ぶこと」が「他者と共生すること」に直結する「複言語・複文化」というCEFRの根幹思想を、

アン ロソ
Un roseau

総合教育科目(基幹教育科目)ガイドブック

No.23

タイトル“Un roseau(アン ロソ)”
—— 一本の葦 —— について

B.Pascal (1623-1662) は、一人一人の人間の存在を一本の葦に例えました。
葦は河岸や湖岸などの水辺に生える、ススキに似た植物です。
その存在は真にはかなく、人も同様で、その存在はきわめてはかないものであると…。
しかし、Pascalは言うのです。

L'homme n'est qu'un roseau, le plus faible de la nature, mais c'est un roseau pensant.
(ロム・ネ・カン・ロゾ、ル・ブリユ・フェーブル・ドウ・ラ・ナチュール、メ・セタン・ロゾ・パンサン)

—— 人は一本の葦に過ぎない。自然界でもっとも弱いものだ。しかしそれは考える葦だ。——

人間は水辺の一本の葦のようにはかない存在ではあるのだが、
考える(思考する、思想する)という行為によって有形の現象の世界(形而下の世界)のみならず、
その奥にある広い広い世界(形而上の世界)を知ることができる存在なのだ。
Un roseauとは「あなた」のことなのです。

疑い、問い続けるための
術(すべ)を持って!



大阪府立大学高等教育推進機構

星野 聡孝

私が大学生だったのは、今から30年以上も前。
そんな昔の、当時としてはありふれた大学生生活
(「とてもお手本とは言えないような生活」を送っていた私が、今の大学生の皆さんにあーだこーだ言うのは、かなり気が引ける。とは言え、大学院生時代を経て、今は大学に身を置く一人の人間として、これまでに感じてきたこと、考えてきたこともある。そこで、昔の自分に向けたアドバイスのつもりで、この文章を書き記そう。

1. 大学院生時代のこと

まずは、私の大学院生時代のことから。大学で主に物理学を学んだ私は、4年次に在籍した研究室出身の先生を頼って、大学院(理学研究科化学専攻)へと進んだ。気分だけはいっぱしの研究者のつもりでいたが、大学生時代にたいした能力を身に付けたわけでも無かった私は、正直、最初の頃は、途方に暮れていた。

そんなある時、研究室の定期購入雑誌に目が留まった。その号は、確か、大学院に関して特集が組

樹里が理解できるようになったのは、多種多様な出自の人びとが日々工夫しつつ社会を営む世界を経験してからのことだ。通りの入口にある日本料理店「イタダキ」

の前をすぎると、樹里は「サイゴン・ロテュス」の前で足をとめた。フランスの旧植民地であるヴェトナムの料理店はパリに少なくないが、ここはファストフード店らしい。ここにしようと思ったとたん何者かにつかられた。危ないなあど顔を上げると、コスプレの如く古風な恰好をした男性が、謝罪とともに名をの。

「わたしはBlaise Pascalという者ですが、ここはパリですか？ 昨日までこんな店はなかったような……」

「パスカルって、あのパスカル？」
一瞬「アライグマの？」とか「ベルばらの？」とか付け足す関西人の血が騒いだが、狭い歩道上のふたりをよけてゆく歩行者たちの視線に、男の腕をつかむと早足で歩きだした。

☆

ブレイズ・パスカルは、一六二三年六月一九日、中仏の古都クレルモン・フェランに生まれた。父エチエンヌは諸学に関心をもつ教養人で、とりわけ数学には熱心だったらしい。その影響か、父に連れられて学者のつどう研究サロンに入入りしていたブレイズ少年は、弱冠十六歳で「円錐曲線試論」を発表している。この論文は、父の数学仲間によってデカルトにも届けられたが、この「パスカル氏のご子息の論文」にたいし、哲学者は微妙なコメントを残したとされる。

樹里が知っているのは、『パンセ』を著し、気圧の単位に名を残した、現代を先取りする文理融合型人間ということぐらいだ。勿論、一七世紀人がどうして二一世紀の

パリに存在するのは、見当もつかない。

「あの動く箱はなんだね？」

「クルマのこと？」

「馬車だつて？ 馬などおらぬが？」

「自動車っていつて、油を燃やして、そのときの圧力を回転する力にして……」

「それは興味深い」

一六四七年、故郷近くの山でおこなった実験に始まる圧力の研究が、エンジンやブレイキを生み出したとは思ってもよらぬ十七世紀人は、通りを行き交う箱たちに見入っている。

「あの長いのもオトモビルかね？」

「パスカッっていつて、だれでも乗り降り自由なの」

「すばらしい！ わたしも、5ソル払えばだれでも乗れる馬車という案をもつていたのだが、実現していたとは！」

「それ、パスカルさんのが先だね」

馬車を持たない庶民のためにパスカルの考案した史上初の乗り合いバス「5ソル^{アサンソル}の馬車」は、一六六二年にパリ市内で運行を開始したが、庶民との同乗を嫌う勢力によって労働者階級を乗車禁止とされ、十五年後には経営難で廃止されている。

「ところで、今日は一六六一年三月九日のはずだが」

「二〇二二年の三月九日」

「なんと！ その、時間もわかるかね？」

樹里はスマホをだす。

「午後一時一〇分」

「まずいな、ホイヘンス君がくる」

土星の輪の発見で知られるオランダの

科学者クリスティアーン・ホイヘンスは、

パスカルと協働して確率の研究をしていた。

記録によれば、一六六一年三月九日の午後、

ホイヘンスはパスカルを訪問したが、パスカルは不在であった。

まれていたように思う。その特集記事の中で、「与えられた研究テーマに対して何らかの結果を出せるようになるのが修士課程（博士前期課程）、自分であらたな研究テーマを見いだし研究結果を出せるようになるのが博士課程（博士後期課程）」といった趣旨のことが書かれていた。なるほど、そうだったのか！

恥ずかしながら、この記事を読んで初めて、私は大学院で学び、研究することがどういうことなのか、どんなことを目標としていくべきなのかを理解した。それから私は、この目標を事あるごとに意識しながら、そして、もがき苦しみながら大学院生時代を過ごし、なんとか学位（博士号）を取得することができた。目指すべきものがはつきりするって、大事。

2. 大学生時代のこと

では、大学生時代の私はどうだったのか？ただ漫然と日々過ごしていたのか？というところ、そんなこともなかった。当時の私は、大学に入るとは、自由になる時間をお金で買うことと捉えていた（金を出したのは親だったが）。自由になった時間で色々なことにチャレンジし、自分の幅を広げよう！

まずは、内気だった自分を少しでも変えようと、クラスの仲間の輪の中に飛び込み、毎晩のように、仲間の下宿で遊び騒いだ。世界を少しでも知ろうと、夏休みにネパール・インドを一人で旅し、赤痢に罹って隔離病棟へ放り込まれた。社会経験を積もうと出版社で編集のアルバイトにのめり込み、経営陣と揉めて仲間たちと集団離職した、などなど。それなりに充実した日々を過ごせたのも、大学生となつて得た時間を自分の幅を広げるために使うという、自分なりの明確な目

標があったからだ。

しかし、である。大学の外でそれなりに充実した経験ができたからこそ、あの頃の自分に言つてやりたいのだ。おまえは大学の中で学びにも、明確な目標を持つべきだ、そうすれば、大学生生活は、もつともっと充実するはずだと。大学にお金を払って得られるのは、自由に使える時間ではない、様々な学習・研究リソースや、一緒に学び研究する仲間なのだと。深く反省……

3. 大学で学びたいこと

では、何を目標にして大学で学んだら良いのだろうか？大学の先生に尋ねたら、百人百様の答えが返ってくるだろう。私なら、当時の自分にこう言う。「物事を疑問い続けられるようになることを目標にしろ」と。そして、「そのための術（すべ）を身に付ける」と。

大学の最も大事な営みの一つである研究は、問いを立てることから始まる。問いを立てるためには、既存の研究を理解し、その中身を疑い（＝批判的検討を加え）、その研究の限界や誤りに気付くことが必要だ。

また、既存の研究を疑うだけでは不十分だ。研究を進める過程で、自分が得た結果や結論をも常に疑い、そこに誤りはないか、他の考え方で説明できないかと、自らに問い続けることが不可欠である。研究結果を発表すると言うことは、その研究が批判的検討にさらされることでもあるのだ。用心、用心！

そう、疑い、問い続けることは、研究者の基本。だからこそ、専門的知識や専門スキルという「術」を大学で身につけておかなければならないのだ。でも、自分分は研究がしたくて大学に入ったわけ

だが、憂いも好奇心に負けたらしい。

—その板きれば？

—スマホつてもわかんないよね

—小さな時計だな。ホイヘンス君発明の振り時計は、そこまで小さくはできない

—基本的には、遠く離れた人とお話しする機械ね。あと、手紙とか。大学の授業でも使うし、もちろん計算だって……

—なんと、計算機なのか！

—そういや、計算機つて、パスカルさんが発明したんだっけ

—いや、発明したのはシッカートだよ。わたしはそれを改良しただけだ

—父親の税務を助けるべく、若きパスカルが改良した自動計算機「パスカルの輪」は、当時、大評判を呼んだ。

—それは、どこかで購入できるのかね？

—だって、お金、持つてへんやん

—家に戻れば少々は

—現代のお金じゃないでしょ

—たしかに……

—あ、その服、高く売れるかも

—だが、服を売りに行った先で盗難事件に巻き込まれ、とんでもない五日間を過ごすことになることを、ふたりはまだ知らない。

☆

—愉快な五日間であったと、最初に遭遇した場所でパスカルは云った。

—パスカルさん、名推理だったね

—人間は華のようにか弱い、考えることができない。これは宇宙最強の能力だよ

—あ、それ、知ってる

—とはいえ、人間は人間である以上、高く飛んだり速く走ったりはできない。だからオトモビールの如き「外の力」に頼る必要がある。学問も同じだよ。わたしもホイヘンス君と協働すること、ひとりではできなかつた学びが可能になった。

振り返りも重要な。樹里も卒論を書くときの覚書に残すとよからう

—わたしたちコンビも名協働したしね

—そっちは記憶に残すとして、もう戻らねば。ホイヘンス君も不審に思うだろう

—ホイヘンスは、三月一二日にもパスカルを訪ねたが不在であつたと書いてある

—じゃあね、いつか、どこかで……

—また会おう、とパスカルが差し出した右手を握るや、その手は掻き消え、その手の持ち主ももう見えない。

—ちゃんと戻れたのかなと思ひながら、ヴェトナム料理店の看板を見やつた樹里は、店のある建物の54という番地表示の下の銘板に気づく。

—旧フランコブルジョワサンミシエル通りのここに、二五四年から一六六二年まで、ブレス・パスカルが暮らした。

—パスカルさんの家だつたのか……

—一六六二年八月一九日、パスカルはパリ市内で没する。亡骸は、ソルボンヌ近くの教会に埋葬された。「人間、それは考える葦である」などの文書を集めた『パンセ』が出るのは八年後のことである。

—大学に戻ろうと歩きだした樹里の口から

ふと『パンセ』の一節がこぼれた。

—「人間は、天使でも獣でもない」

—だから他人と一緒にがんばるんだもんねと呟いて前を見ると、パンテオンのドームの上に、真つ青な空が広がっていた。

福島 祥行（ふくしまよしゆき）

1964年生まれ

1992年 大阪市立大学後期博士課程満期退学

文学研究科・教授
専攻分野／相互行為論、言語学、フランス語圏学
担当科目／フランス語基礎、特修、文化とコミュニケーション、大阪市大でどう学ぶか、大阪の知

はないという人も、大勢、いるだろう。そんな人たちも、疑い、問い続けるための術を大学で身に付ける必要があるのだろうか？ ももちろん！

4. コロナの時代に……

この2年ほど、新型コロナウイルスの蔓延により、我々は様々な問題に直面し、人々の意見は大きく分かれた。東京オリンピック開催の是非、G・T・Oキャンペーン継続の是非、ワクチン接種の是非……これらの問題について、皆さんはどう考えただろうか？ 特に、ワクチン接種は、皆さん自身にも、直接、関わる問題だ。未成年なら、親の意向に左右されるのは仕方がないとして、もし大人になってこの問題に直面していたとしたら、皆さんはどうしただろうか？

そんな時に必要となるのが、疑い、問い続ける力だ。人の意見を鵜呑みにしてはいけない。自分の感情に流されてはいけない。大学で得る専門知識や、教養科目等を通して学ぶ、多面的な物の見方・捉え方を駆使し、疑い、問い、考え続けたい。判断を下すべきだ。

医者は、接種するメリットがデメリットを上回ると言う。それは、どんなデータに基づいているのだろうか？ その評価は科学的に適切なものか？ メリットが上回っていたとしても、自分に副作用がでるかもしれないから打ちたくないと言う人も多い。それで良いのか？ この時の構図は、倫理学で出てくる「トロコク問題」と非常に類似しているが、もつと定量的に考えられないか？ そうすると、人の命に値段を付けざるを得ないが、どうしたら良い？ 経済学的観点から命の値段を評価方法があったはずだが、それは納得感のあるものか？ 他の評価方法は無いのか？……

今の時代、多様なメディアを通じて、人々が自分の意見を広く伝えられるようになった。それと同時に、明らかにデマやフェイクニュースが、さも真実かのごとく、広く拡散されるようになった。そんな今だからこそ、我々は、それらを鵜呑みにせず、適切に疑い、問い続け、考えていくことがますます必要なのだ。また、その考えが独りよがりのものでないか、自分自身の考えをも疑い、問い続けなければならぬのだ。

5. 最後に……

実は、疑うこと、問い続けることの大切さを私が深く学んだのは、教養科目の「哲学」の授業においてであった（私だって、少しはまじめに大学で学んでいたのだ）。細かい話は覚えていないが、「哲学は、哲学とは何かを問い続ける学問である」という教えだけは、頭にこびりついている。なんて不毛な学問！ 哲学という学問に憧れを抱いていた私に、ある種の幻滅感を与えた罪作りな授業ではあったが、問い続けること、そして、おのれをも深く疑うことの大切さを教えてくれた授業でもあった。

さあ、皆さんも、大学で様々な学問と出会って欲しい。そこで、物事を疑い、問い続けるための術を身に付けて欲しい。そして疑ってみよう、まずは、私が書いたこの文章から！

星野 聡孝（ほしのあきたか）

1966年生まれ

1994年京都大学大学院理学研究科博士後期課程研究指導認定、退学 京大博士（理学）
現在、大阪府立大学高等教育推進機構・教授
専攻分野／簿簿構造解析、教育学習支援システム開発
担当科目／「物理学A（古典力学）」、「物理学B」（電磁気学）、「物理学実験」他